

論題	五山版『地蔵菩薩本願經』について
著者	納富常天
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第15号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1989年(平成元年)3月
判型	JIS-B5(182mm × 257mm)

五山版

『地藏菩薩本願經』

告光目汝母不久當生汝家覺飢寒即當言說其後家內婢生一子未滿三日而忽言說汝泣合掌告於光目生死業緣果報自受吾是汝母久與開冥自別汝來累墮大地獄蒙汝福力方得受生為下賤人又復短命壽年十三更落惡道汝有何計令吾脫免光目聞已知母無疑便咽悲啼而白婢子既是我母合知本罪作何行業墮於惡道婢子答言以親害毀罵二業受報如是若非汝福救我吾難以是業脫未舍離脫光目問言地獄罪報其事云何婢子答言罪苦之事不意再說百千歲中卒難竟光目聞已兩淚號泣而白空界願我之母永脫地獄畢十三歲更無重罪及惡惡道十方諸佛慈哀救我聽我為母所發廣大誓願若得我母永離三塗及斯下賤乃至女身永劫不受者願我今日對清淨蓮華目如來像前却復百千萬億劫中應有世界所有地獄及諸惡道罪苦眾生皆願救拔令離地獄畜生餓鬼等處如是罪報善人盡成佛身我則然善哉成正覺發誓願已具聞清淨蓮華目如來而告之曰光目汝大慈愍善能為母發如是大願吾觀汝母十三歲畢捨此報已生為梵志壽年百歲適是報後當生無憂國土壽命不可計劫後成佛無量度人天其數如恒河沙

佛告定自在王今時羅漢福度光目者即無盡善善薩定光目母者即解脫善薩是光目女者即地祇善薩是也過去久遠劫中如是蒸盛發恒河沙願度眾生未來世中若有

1 地藏菩薩本願經卷上(前欠) 首

地祇善薩本願經地獄名号品第五 中卷
爾時普賢善薩摩訶薩白地藏菩薩言仁者願為天龍四眾及未來現在一切眾生說娑婆世界及閻浮提罪苦眾生所受報處地獄名号及惡報等事使未來世末法眾生知是果報地祇答言仁者我今兼佛威神及大士之力略說地獄名号及罪報惡報之事仁者閻浮提東方有山号曰鐵圍其山周圍無日月光

有大地獄 号無間又有地獄 名大阿鼻
復有地獄 名四角 復有地獄 名曰龜刀
復有地獄 名曰箭 復有地獄 名曰尖山
復有地獄 名曰通槍 復有地獄 名曰鐵車
復有地獄 名曰鐵床 復有地獄 名曰鐵牛
復有地獄 名曰鐵衣 復有地獄 名曰千刃
復有地獄 名曰鐵驢 復有地獄 名曰洋銅
復有地獄 名曰抱柱 復有地獄 名曰流火
復有地獄 名曰耕石 復有地獄 名曰對首
復有地獄 名曰燒脚 復有地獄 名曰嚼眼
復有地獄 名曰鐵丸 復有地獄 名曰諍論
復有地獄 名曰鐵鉢 復有地獄 名曰多頭
地祇言仁者鐵圍之內有如是等地獄其數無限更有

叫喚地獄 按舌地獄 糞尿地獄 銅鎖地獄
火狗地獄 火狗地獄 火馬地獄 火牛地獄

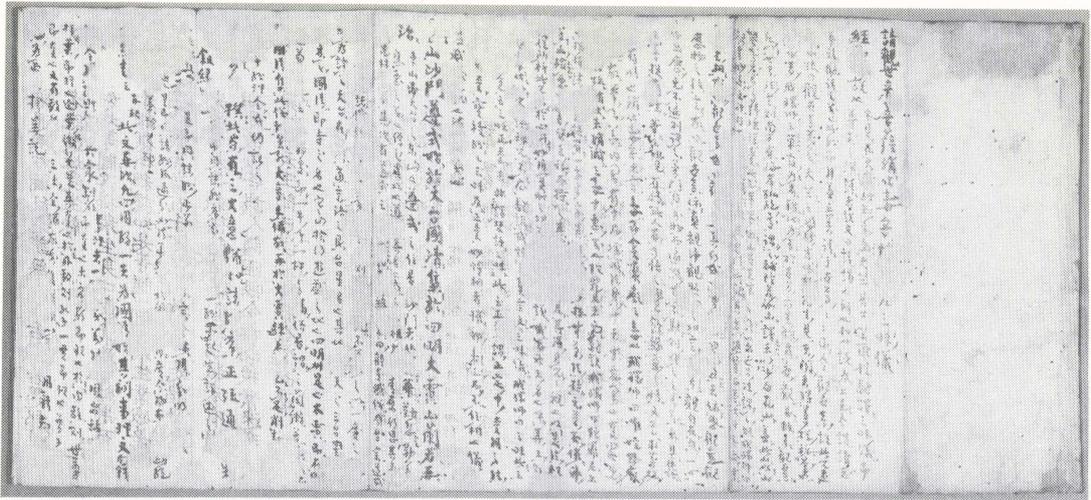
2 地藏菩薩本願經卷中 首

地祇善薩本願經校量布施功德緣品第十卷下
爾時地祇善薩摩訶薩兼佛威神從座而起胡跪合掌白佛言世尊我親業道眾生校量布施有輕有重有一生受福有十生受福有百生千生受大福利者是事云何唯願世尊為我說之今時佛告地祇善薩善哉今於切利天宮一切眾會說閻浮提布施校量功德輕重汝當諦聽吾為汝說地祇白佛我疑是事願樂欲聞

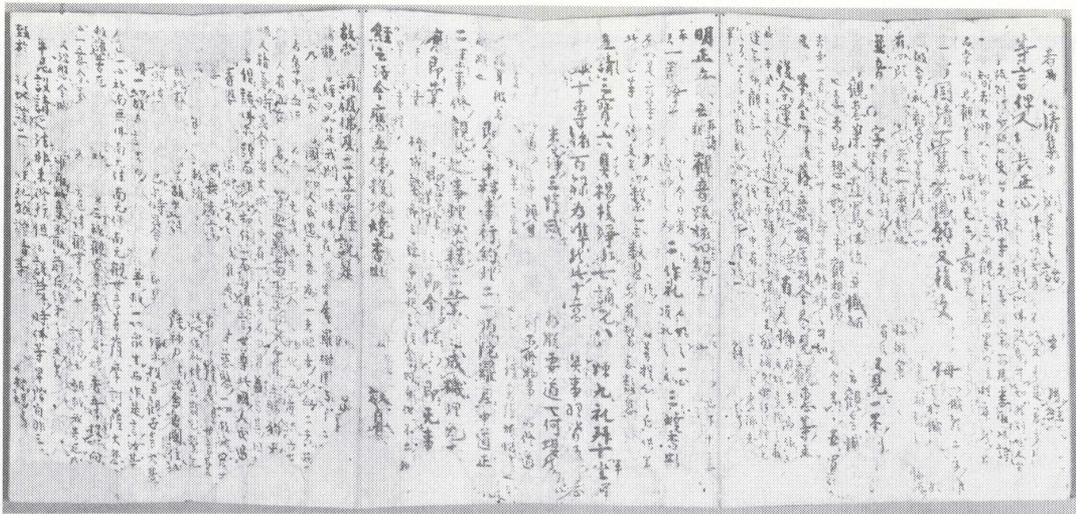
佛告地祇善薩閻浮提有諸國王宰輔大臣大長者大刹利大婆羅門等若遇家下貧窮乃至癯殘瘡啞聾癡無目如是種種不完具者是大國王等欲布施時若能具大慈悲心舍笑親手遍布施或使人施教言慰喻是國王等所獲福利如布施恒河沙佛功德之利何以故緣是國王等於是貧賤輩及不完具者發大慈心是故福利有如此報百千生中常得十寶具足何況衣食受用

復次地祇若未來世有諸國王至婆羅門等遇佛塔寺感佛形像乃至菩薩聲聞辟支等像躬自營辦供養布施是國王等當得三物為帝釋身受勝妙樂若能以此布施福利迴向法界是大國王等於十劫中常為大梵天王復次地祇若未來世有諸國王至婆羅門

3 地藏菩薩本願經卷下 首



7 請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀注積(仮題) 首



7 請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀注積(仮題) 文中

五山版『地藏菩薩本願經』について

納 富 常 天

はじめに

鎌倉時代以降、来朝禅僧や日本からの渡海求法僧などにより、禅が多元的に伝えられた。その実情は太真恵団の『本朝伝来宗門略列祖伝』や、釈半人子の『二十四流宗源図記』に詳しい。これらの禅は北条氏をはじめとする諸豪族、さらには公家階級に積極的に受容され、鎌倉や京都を中心に一大叢を形成したが、それとともに、日本文化史にも大きな影響を与えた。五山版もその一つといわなければならぬ。

ここでは神奈川県立博物館所蔵の五山版『地藏菩薩本願經』⁽¹⁾（以下本館所蔵本と略称する）について検討を加えると同時に、巻上紙背に書写されている稀観書『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀』注釈（書名欠）について考察し、あわせて本文を紹介したい。

(一)

まず鎌倉を中心とする出版事業の動向と、五山版について概観してみたい。鎌倉開府を契機に、鎌倉を中心とした東国においては、仏教の盛行、宋元文化の流入、京都文化の移入、経済の発達など目

覚しいものがあつたが、それにもなつて出版事業も著しく繁栄した。それは極楽寺（戒律関係）、松谷寺・称名寺（華嚴関係）などの南都版（春日版・東大寺版・西大寺版・泉涌寺版など）を基盤としたもの、建長寺・円覚寺（禅籍関係）などの宋槧本を基調としたもの、さらには摺供養を中心とした天台系統のものに大別することができよう。⁽²⁾

とりわけ建長寺・円覚寺などの禅林で出版されたものは、通常五山版⁽³⁾と呼称されているが、禅宗の発展とともに飛躍的に増大し、東国では建長寺回春庵や円覚寺統燈庵を拠点として、武州立川普濟寺、甲斐塩山向岳寺、下野足利行道山浄因庵、武蔵国広円寺などの地方禅林でもさかんに出版された。

いま鎌倉を中心に出版された五山版を、遺品や目録などにより掲げてみよう。

西暦	年月日	書名	開版者	典拠
三五	文永二年以前	元庵禅師語録	建長寺元庵普寧	日本古印刷文化史
三七	弘安元年	首楞嚴經会解	世良田長樂寺玄海尼	五山版の研究
三八	この頃	蘭溪和尚語録	建長寺か	〃
三八	弘安六年二月	伝心法要	寿福寺大休正念	東洋文庫本刊記
三四	七年	大休念禅師語録	〃	日本古印刷文化史
三七	十年五月	禅門宝訓集	建長寺正統庵古倫	日本古刊書目

一三五	至徳二年	録	東明恵日和尚語		書誌学復刊新 十九号
一三七	永和三年	經	金剛般若波羅蜜	円覚寺恵從	日本古印刷文 化史
	この頃		円覚經疏		五山文学新集 甲四五
一三四	応安七年以前	經	地藏菩薩本願經	建長寺大喜法忻	同書刊記
一三七	貞治六年三月八日 至徳四年		華嚴經・大集經	武州立川普濟寺	仏教史学第二 号
一三六	文和五年 応永十七年		大般若經(尊氏 願經)	智感・法機	同書刊記
一三七	文和頃		仏光国師語録	建長寺正統院妙 霖	日本古印刷文 化史
一三九	暦応二年頃		宗門千字文	浄智寺竺仙梵僊	同書自序
	鎌倉末期		明極和尚(元朝) 語録		五山版の研究
一三一	元弘元年秋		来々禪子集	建長寺竺仙梵僊	日本古印刷文 化史
一三四	元亨四年九月九日		人天眼目批郢集	相州浜部性円	神奈川県史古 代中世編二三 九一
一三五	正和四年		清拙和尚禪居集	建長寺正統院妙 霖	新纂禪籍目錄
一三〇二	正安四年九月		伝心法要	寿福寺玉峯潜奇	金沢文庫本刊 記
一三五	永仁三年		禪林僧宝伝		五山版の研究
一三六	十年九月		伝法正宗記	相州靈山寺宝積 ・如心・寂慧	大東急記念文 庫本

一四一	〃		拈八方珠玉集	円覚寺	日本古印刷文 化史
一三六	三年二月十五日		塩山和泥合水集	甲斐向岳寺明道	五山版の研究
一四〇一	応永八年八月		碧巖録	性禪	大阪府立図書 館本刊記
一四〇四	十一年小春		夢中間答集	下野行道山淨因 庵日誌	五山版の研究
一四〇五	十二年十月十三日		諸偈撮要	〃	宮内庁書陵部 本刊記
一四〇六	文安三年	經	金剛般若波羅蜜	武蔵広円寺常牧 甲斐向岳寺	積翠軒文庫写 本奥書
					五山版の研究

(二)

本館所蔵本はその刊記から建長寺版とされているが、これは地藏菩薩を本尊とする建長寺の出版物として、まことに相応しいものといわなければならない。いま本書以外に『日本古刊書目』、『五山版の研究』などにより、従来知られている『地藏菩薩本願經』の刊本を示すと、つぎのようなものがある。

(1) 興福寺版地藏菩薩本願經 三帖

刊記 地藏菩薩本誓願 釈尊切利附屬説

此經所明發信心 故更刻模伝未來

以此功德及法界 先救三途極重苦

人天厭離生死海 自他同獲菩薩化

嘉元四年丙午六月廿四日願主南都興福寺僧

覚性

(2) 地藏菩薩本願經 二帖
宝徳四年二月九日開板

(3) 地藏菩薩本願經 二帖
墨書 爲芳林郁公上座追善

文明十七年四月乙廿三日 主周韶

(4) 地藏菩薩本願經卷中 一帖

山田文昭氏所藏

(5) 五山版地藏菩薩本願經 三卷二帖

龍門文庫所藏

刊記 得元朝印本重開版応安癸丑正月日誌

(6) 仮名地藏菩薩本願經

(5) 下巻尾墨書 カナカキノ印板^ノ本^{ニテ} 一校了 慶恵

このうちはつきりしている五山版は、応安六年（一一三七三）刊の龍門文庫本だけであるが、貞治六年（一一三六七）の刊記をもつ本館所蔵本は龍門文庫本より六年まえに出版されたことになる。

ここで本館所蔵本について書誌学的考察を加えてみたい。

(1) 数量 三帖 帙入り 帙の題簽には「鎌倉建長寺版 地藏本願經 貞治六年刊 缺三帖」とある。

(2) 調卷 大正新修大蔵経本が全十三品（章）を上・下二巻にし、巻上は切利天宮神通品第一から如来讚歎品第六まで、巻下は利益存亡品第七から囑累人天品第十三までとしているのに対して、本館所蔵本は上・中・下三帖にし、巻上は切利天宮神通品第一から閻浮衆生業感品第四まで、巻中は地獄名号品第五から称佛名号品第

九まで、巻下は校量布施功德因縁品第十から囑累人天品第十三までとしている。

(3) 表紙 巻上・下は濃い藍色表紙に改装してあるが、原装と思われる巻中は、明るい藍色表紙で、中央に「地藏經 中巻」、その右下に「祐智」と墨書されている。これは祐智が所持していたことを示すが、祐智については明らかでない。

(4) 印記 三帖とも巻末に「寶玲文庫」の朱印（写真4・5）があり、フランク・ホーレー⁽⁴⁾の旧蔵であったことがわかる。

(5) 行界 毎半折六行 一行十七字 一板三十行 折本 上下単辺界高20・9↘21・0 cm ただし巻中末尾十七行（板木一枚）は20・7 cm、巻下中欠のあと二十三行（板木二枚）は20・4↘20・7 cmである。

(6) 存欠 全体に虫損があるのみならず、つぎのように大部分が散逸している。

巻上は前欠で、わずかに閻浮衆生業感品第四の後半が残存している。

巻中は中欠があり、地獄名号品第五から如来讚歎品第六の前半までと、称佛名号品第九の後半がある。

巻下も中欠があり、校量布施功德因縁品第十の大部分と、囑累人天品第十三の後半がある。

いま因みに、残存量を大正新修大蔵経本と比較してみると、27・4%（巻上22・5%、巻中33・7%、巻下25・2%）にすぎない。なお巻上にはわずかではあるが、補刻と思われる部分が認め

られる。

(7) 版心 卷上に「地々上 十一」と一ヶ所あるのみで、卷中・下にはまったくない。

8 刊記 卷上・下尾につぎのようにある。

卷上尾(写真4)

妙松	妙擘	宗信	靈球	圭照	門冲	性忠	希存
妙悦	希沾	性英	昌末	昌暁	元存	全堅	全参
良恩	良縁	希杲	周説	元聞	元遵	孚文	元忻
希杲	希繁	至麟	之居	担有	希慶	良啓	安肇
義仁	妙欽	顕順	妙瑞	聖宗	妙浦	是阿	妙行

了融

契壽	契秀	祖印	見照	契覚	昌悦	覚宗	宗阿
昌久	昌栄	宗弘	成見	中嶋	昌源	妙徳	良祝
善徳	契善	希拾	性久	契浄	契道	蓮阿	昌本
希昇	契鑿	道圓	希観	希山	成願	契近	奥聖
契任	希源	昌安	希宝	定心	希廣	希福	蓮聖
公慧	契薰	辰夜刃	幸松	契恩	契光	希妙	希政
契應	聖光	善阿	秀阿	鶴女	明心	長元	重秀
妙阿	了聖	契縁	導照	妙戒	力行	元是	宗秀
明照	如禅	本亨	頓悟				

延文三年 戊戌 正月吉日 比丘希親謹書

卷下尾(写真6)

前海會能天親公西堂

書寫此經上中下卷

并命工雕板所願

流行世界人々受持

八怖消除十福普遍

貞治六年丁未三月八日

前建長大喜法忻記

此板留在于回春菴

これらの刊記は出版の実情——時期・場所・目的・出版者・助縁者など——を示すものであるが、卷上尾の刊記は意味が明らかでない。妙松・妙擘ら百九名は本経出版の助縁者(費用の寄進者)、比丘希親は勸進僧と思われ、延文三年(一一三六)、出版を企てたことがわかる。ただ希親については、いかなる人物か不明である。また卷下尾の刊記により、能天親西堂(円覚寺塔頭海会庵—朴中梵淳の塔所—の前庵主)が書写したものを、貞治六年(一一三六)、大喜法忻が八怖を消除し、十福を普遍せんため出版したことがわかる。これは大喜入寂の前年にあたる。

因みに能天親西堂については明らかでないが、大喜法忻(?!—三三八)は今川基国の子で、太平妙準の法嗣である。また来朝僧の竺仙梵僊にも随侍し、学芸上の感化を受けたが、那須雲巖寺(第十五世)、駿河承元寺、浄妙寺(第三十四世)、浄智寺、円覚寺(第三十世)、建長寺(第四十世)に歴任し、応安元年(一一三六)九月廿四日、円覚寺統燈庵に入定示寂している。

法嗣には出版事業で活躍した偉仙方喬をはじめ、十余人を数える

が、門生に義堂周信・絶海中津・中巖円月などの代表的五山文学作者がいたことは注目しなければならない。

(9)本文 残存部分と大正新修大藏経本と比較照合すると、わずかに出入りが認められる。またその事情は明らかでないが、一筆による訓点⁵が施してあるのみならず、異本とも校訂している。なお国語学のうえから、重要と思われる訓があるから、参考までに掲げておく。

累カサ子テ 卒ツ子ニ 聽ユルシ下へ 迄一至イタルマテ

蔓ハヒコル 愕アナツル 誣アサムク 遞タカヒニ

邃フカシ 心キモ 尿ユハリ 盤ワタカマリ

繳マトハル 驟ウサキムマ 譏ソシリ 然トモシ

饒ユタカ

(三)

ここで本書の問題点について考えてみたい。まず巻下尾の刊記「前海会、能天親公西堂書写此経上中下巻」によるかぎり、三帖は一筆でなければならない。にも拘わらず、巻上は他の二巻に比し、きわめて端麗で力強く、一見ただけでも書体が違っていることがわかる。(写真1・4) また巻上尾刊記に「延文三年 戊戌正月吉日 比丘希親謹書」とある希親謹書の部分は、刊記のみであるか、巻上全部であるか、刻工の問題などもあるから、にわかには決定できないが、⁶少くとも勧進の年次(延文三年 一一三五八)が、出版年次(貞治六年 一一三六七)より九年も前であることは注意する必要がある。

また巻中の後半十七行(中欠より後の部分、写真5)は、まえ

にも述べたように、界高が違っているが、虫損やしみの状態も、前半とはまったく合致しない。また書体も前半や巻上、および巻下と異なっている。

なお三帖の内題・尾題はつぎのとおりである。相互にわずかではあるが表記を異にしている。

巻上内題 前欠のため不明

尾題 地藏菩薩本願経巻上

巻中内題 地藏菩薩本願経地獄名号品第五中巻

尾巻 地藏菩薩本願経巻中終

巻下内題 地藏菩薩本願経校量布施功德因縁品第十巻下

尾題 地藏菩薩本願経巻下

もし巻下尾の刊記のように、能天親一人による書写であるならば、とりわけ表記は統一するのが普通ではなからうか。

このように、巻上は書体の違い、勧進の年次と出版年次があまりにも離れていることから、建長寺版とは別版としなければならない。また巻中の後半部分も界高や、虫損・しみの状態の違い、書体および尾題の表記法の相違などから、建長寺版や巻上とも別版としなければならない。しかし施された訓点が一筆であることは、この三帖がいかなる事情によるものかわからないが、はやくから一具になっていたことを示すものである。

(四)

最後に巻上紙背にある著者・筆者ともに不明の『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀』(以下『三昧儀』とする)注釈(写真7・8)

について触れてみたい。この『三昧儀』は宋の遵式（九六四—一〇三三）が著わしたものであるが、遵式は会昌の廢仏や、唐末五代の戦乱により散佚した天台典籍の収集とその調査につとめ、天台三師（智顛・灌頂・湛然）の著作二百三十九巻の書目をおさめた『天台教觀目錄』を作製し、天聖七年（一〇二九）、これを石に刻して天台教學の興隆をはかっている。また晩年には念仏三昧を修し、淨土教も宣揚しているが、名は朝野に聞え、徳は人畜におよび、登門の學者千をもつて数え、著書もすこぶる多かつたといわれている。

『三昧儀』の結構は叙縁第一、明正意第二、勸修第三の三門からなるが、なかでも正宗分に相当する明正意第二は、第一莊嚴道場、第二作礼法、第三焼香散華、第四繫念数息、第五召請、第六具楊枝淨水、第七誦三呪、第八披陳懺悔、第九礼拝、第十誦經からなっている。

この『三昧儀』の注釈で従来知られているのは、わずかに洛北興聖寺（円通山、臨濟宗、上京区上天神町）石梯道雲が著わした『請觀音經三昧儀註解』（外題は『觀音懺法註解』）二巻二冊があるのみである。著者の石梯道雲（一六四五—一七一五）は一絲文守の弟子南嶺慧詢の法嗣で、永源寺（滋賀県神崎郡永源寺町）九十世に出世し、正徳五年二月十一日、七十一歳で示寂している。またこの『請觀音經三昧儀註解』にはつぎのような自序と泊如運敵の跋がある。

請觀音三昧儀註解序

夫惟^レ有^レ過^ラ自^ラ覆^レ之^ラ則^シ如^シ水^ノ赴^レ海^ニ衆^ク罪^ム漸^ク積^ム知^レ過^ラ

自^ラ露^レ之^ラ則^シ如^シ病^ニ發^シ汗^ヲ客^ヲ邪^ヲ即^ク除^ク是^ハ故^ニ古^ノ人^ノ製^シ懺^ノ摩^ノ法^ヲ
導^キ衿^ヲ襦^ヲ於^テ既^ニ往^ニ施^ス規^ヲ矩^ヲ於^テ將^ニ來^ニ者^ノ不^レ暇^ニ枚^ヲ擧^フ矣^ニ就^テ中^ニ
宋^ノ眞^ノ宗^ノ朝^ノ東^ノ山^ノ沙^ノ門^ノ遵^ノ式^ヲ依^テ請^ク觀^ク音^ヲ著^シ乎^ニ三^ノ昧^ノ儀^ヲ是^ハ名^ニ圓^ノ通^ノ

懺^ト本^ノ朝^ノ文^ノ治^ノ三^ノ年^ノ建^ノ仁^ノ開^ノ山^ノ千^ノ光^ノ祖^ノ師^ノ再^ニ入^ニ宋^ノ國^ニ傳^ヘ佛^ノ心^ヲ宗^ヲ兼^テ
受^ク懺^法歸^朝之^後於^テ筑^ノ之^前州^ノ聖^ノ福^ノ寺^ニ始^テ行^レ之^ヲ從^レ爾^ノ而^テ
來^カ天^ノ下^ノ叢^ノ林^ノ浸^ニ盛^ニ弘^ノ通^ノ迨^レ今^ニ不^レ絶^ニ雖^レ然^リ人^ノ情^ノ日^ノ淪^ニ

正^ノ儀^ノ稍^ノ廢^ス偶^々要^ス之^者婉^レ變^シ煩^ノ黷^ノ之^内綢^ノ繆^ス塵^ノ勞^ノ之^間
匪^ス香^ノ滅^レ障^ノ之^難卻^テ招^ク荼^ノ毒^ヲ三^ノ寶^ノ祥^ノ瑞^ヲ於^テ茲^ノ都^ノ殲^ス可^レ
歎^ス耳^ミ余^ノ昔^日爲^ニ三^ノ子^ノ講^ス三^ノ昧^ノ儀^ヲ一^ニ反^然以^テ未^レ覽^ニ

可^レ據^ク者^ノ間^ニ有^ニ於^テ義^ニ不^レ達^ス頃^ニ親^ク閱^ク天^ノ台^ノ請^ク觀^ク音^ヲ疏^ヲ并^ニ智^ノ
圓^ノ鈔^ノ舊^日疑^滞頓^ニ氷^ノ消^ス焉^便隨^レ時^ノ筆^シ之^式註^ス其^ノ梗^ノ概^ヲ雖^レ
不^レ敢^テ一^事錯^ヘ胸^ヲ臆^レ我^ノ且^ツ固^ニ陋^ニ無^シ識^ヲ至^ス或^ハ有^ニ闕^誤

埃^ツ後^ノ之^君子^ヲ皆^ニ延^寶九^ノ年^ノ歲^次辛^酉秋^七月^日題^阿誰^軒
請^ク觀^ク音^ヲ三^ノ昧^ノ儀^ヲ註^解跋^ヲ
傳^ニ云^ク因^テ雲^ノ灑^レ潤^ヲ則^ク芬^ノ澤^ノ易^ク流^レ乘^テ風^ノ載^レ響^ヲ則^ク
音^ノ微^ク自^レ遠^シ是^ハ事^ノ勢^ノ之^當然^{ナリ}觸^レ類^ノ推^レ之^不誣^矣近^ク閱^ニ

興^ノ聖^ノ石^ノ梯^ノ禪^ノ師^ノ所^ノ註^ス三^ノ昧^ノ儀^ヲ有^リ因^リ雲^ノ乘^レ風^ノ之^勢其^ノ
製^也專^ニ據^ク天^ノ台^ノ經^ノ疏^ヲ旁^ニ資^ク孤^ノ山^ノ疏^ノ鈔^ヲ而^レ無^シ一^事涉^ニ

於臆解^ニ。所以^{ナリ}致^ス有^ルコトヲ章段^ノ分^レ、文義水^ノ釋^ル之美^ニ也。寔^ニ如^シ芬澤之沛然、音徽^ノ之清亮^{タル}。豈^シ圖^シ形^ヲ於影^ニ、胡蘆依^ル椽^ニ之類^{ナラン}乎。且剖拆會通、自^レ非^ハ熟^シ爛^シ乎教乘^ニ、洞^ニ達^{スル}乎織^旨者^上、又孰得^テ而及^シ焉。況^ヤ夫擲^リ智者^ノ之英粹[、]據^ニ法慧^ノ之菁華[、]則人埤^ニ仰信^ヲ、復何疑^シ哉。如^シ儀文^ニ云^ニ。悉用^テ經疏及^ヒ止觀^ノ語^ヲ、俾^レ人^ヨ增^セ長^正心^ヲ。蓋取^ニ斯^ノ義^也。夫人既^ニ仰信^{スルトキハ}、則懺儀弘^ク布^キ、而註解遠^ク傳^{ント}、乃理^ノ之當然^{ナリ}。是亦因^レ雲^ニ而芳澤流^レ、乘^レ風^ニ而音徽遠^キ之謂^{ナリ}也。肆^ヒ矣哉撰述^ノ之用^ル心^也。予甚嘉^ス焉。屬^コ諉^ス予跋語^ヲ。迺據^ニ中心^ノ之所抱^ヲ、以筆^ニ之簡末^ニ。皆

天和癸亥春正月吉日

瑞鹿山休隱比丘泊如運敬啟書

これらによって『三昧儀』が再入宋した榮西によって將來されたこと、筑前聖福寺において始行されてから禪林に弘通したこと、さらには石梯が延宝九年（一六八一）三十七歳のとき、もつぱら智顛の『請観音經疏』や、智円の『請観音經疏闡義鈔』に基づき著わしたものであることがわかる。

さて本館所蔵本巻上紙背にある『三昧儀』注釈は、まえにも述べたように、著者・筆者ともに不明であるが、『三昧儀』が榮西將來

のものであるという理由から、書写されたことはいうまでもない。またこれは禪林における『三昧儀』の流布および研究の実情を示すものでもあるが、残念ながら後欠⁽⁹⁾で、巻首から叙縁第一、明正意第二の第二作札法までしか残存していない。『三昧儀』の本文と比較し、単純計算した場合、29・3%になる⁽¹⁰⁾。

注釈にあたっては『三昧儀』の本文を抽出し、これに割り注を施しており、形式的には、石梯の『請観音三昧儀註解』と同じであるが、石梯が智顛や智円の疏・鈔に依拠して詳細に注釈しているのに対し、比較的簡略である。また序分と正宗分のはじめの部分しか残存していないばかりか、虫損部分は厚手の紙で、文字のうえから稚拙な修補をしているから、随所に判読できない部分がある。しかし、管見するかぎり、従来の書目などにはまったく知られていない稀観本であるから、学術的に注目しなければならない。

むすび

以上本館所蔵本と、その紙背に書写してある『三昧儀』注釈について考察したが、つぎのようなことが判明した。まず本館所蔵本は巻下尾の刊記から、いままでなんのためにもなく建長寺版とされていたが、巻上は書体の相違、および巻上刊記にある勸進年次と、巻下刊記の出版年次が九年も離れていることから、別の五山版としなければならぬ。またこれは取りも直さず、巻上が現存する五山版『地藏菩薩本願經』の最古のものということになるのみならず、助縁者についても、建長版という理由から、鎌倉を中心とする人物と思われていたが、別版ということになれば、にわかに鎌倉の人物

とは断定できない。また巻中尾の部分も、いま一度検討する必要があるが、界高や虫損・しみの状態の違いや、書体などから、建長寺版や巻上とも異なる別版とすべきであろう。もしそうだとすると、本館所蔵本は二種の五山版と、いま一つの別版（これも五山版かも知れない）がはやくから一具にされ、一筆による訓点が施されている特異な性格をもつ資料としなければならない。

また巻上紙背に書写してある『三昧儀』注釈の断簡は、著者不明であり、その注釈も簡略ではあるが、従来未知の稀覯書であるから、学術的に非常に重要である。

[注]

- (1) 昭和四十九・五十二・五十七年の弘文荘売立て目録に収録され、はやくから郷土の重要な関係資料として関心を抱いていた。
- (2) 拙著『金沢文庫資料の研究』参照。
- (3) 川瀬一馬氏はその著『五山版の研究』で、禅籍を事彙類、清規、史伝類、宗要古則、語録に大別し、およそ三百十種、そのほかに外典類が約百種あるとしている。しかしこのなかには建長寺版『地藏菩薩本願経』は含まれていない。
- (4) 一九〇六年英国に生まれる。リバプール・ケンブリッジ・バリ・ベルリン大学卒業、ロンドン大学言語学教授を経て、東京外語・文理科大学・第三高等学校などの英語の講師をつとめ、のちにはタイムズの特派員としても活躍したが、蒐集家としてもっとも有名である。
- (5) 玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』参照。
- (6) 書体からすると刊記の部分だけと考えられる。
- (7) 『天竺別集』巻上、竺沙雅章氏「宋代における東アジア仏教の交流」（『仏教史学研究』第三十一巻第一号所収）参照。

(8) 『望月仏教大事典』参照。

- (9) 巻上（表）が前欠であるから、その紙背は必然的に後欠となる。
- (10) 表の『地藏菩薩本願経』巻上は22・5%が残存し、その紙背に書かれた『三昧儀』注釈は29・3%あるから、単純計算をした場合、注釈は巻上だけに収まる。

[付記]

本稿執筆にあたり、当館八幡義信専門学芸員・相沢正彦学芸員に御教示と御世話を頂いた。また掲載した写真は井上久美子主査撮影のものを使用した。

凡例

- 一 改行は原文どおりとした。
- 一 虫損などの修補で判読できない部分は□□にした。
- 一 漢字は原文どおりとした。
- 一 訓点等は原則として原文の表記どおりとした。
- 一 佛・菩薩・人名には文字の中央に一本、書名には中央に二本、地名には右側に一本の朱引があるが省略した。
- 一 筆者が私に校訂した部分は（ ）を付し傍注した。

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀

經即佛說也
今見在大藏經知字二天竺居士竺難提譯三昧儀即
遵式之撰請者說文曰請謁也扣也讀爲上声今謂請者

奉請勸請之義也此經即月蓋長者請于世尊即令觀世音說此呪者也

○歲疏曰觀世音菩薩天竺云三婆樓吉低稅衆生見者聞者得菩提稱名者

○衆苦戒環師云單發爲聲雜比爲音於世間衆苦雜聲齊觀並救號觀世音
九以世間法言則南方有海岸孤絕處謂之補陀落伽山譯者以少白花山蓋此山以山

攀者多名之薩埵深愛此花一事畧出山谷先生之語以出世間法謂之則戒環師曰
觀音妙圓文行自一心出應无不遍號普門此觀其聲隨而答大千圓應無

來去相或曰觀世音或曰觀自在其行或曰普門或曰圓通者依悲觀慈觀
應物之能言故曰觀世音依真觀淨觀照心之功言故號觀自在自一心

而出應无不遍則識之普門自萬物而遍照無不融則識之云菩薩者具梵語
云菩薩薩埵華云覺有情此人有了悟之覺餘緣患之情又是求菩提

之有情也消伏毒害者言毒即貪瞋癡三毒也戒環師曰唯姪怒癡

○故舉三蓋內業有十而壞滅法身十者十惡業也事畧見

普門品疏消伏者消滅三毒十惡義也陀羅尼者无識記戒環師曰陀羅尼亦

曰總持諸仏密語有二字多字異能以一字捨無量法持無量義摧邪

立正殮惡生善皆能捨而持之其依名陀羅尼其用名呪祝也以是法祝之
使從所祈此呪出於心術妙用冥加之功不可議或鬼神王名也呼其王則

明正意第二 化仏、談也。是即同諸經、正宗分□□所宗之体、用分明說之。

觀修第三 流通也是即同諸經、流通分。如法花經、若於閻浮提內、廣令流布、使不斷絕。蓋謂之耶。

叙緣起云 此文再治九四因緣。一者為國清始、其間事理文句錯

雜 命用經題以異衆製 事理者一切之義 萬法之用出辭題色

即事也未顯即理也於內教則世尊

指業即理也迦葉 微笑是其事也於外教則孔子一貫即理也曾子一唯
即事也又有教行理之三未全備故前後錯雜以是命用清聲音以之

題為正說捨異說

二者為國清集多 潤色之語並削去悉用經疏止觀

等言俾人增長正心 佛語以義為本不以文為是若多用華
美之文則不似佛語即可知然則世人豈取

信乎疏則法藏疏也天台止觀等者蓋台宗所用悉取以證此美
天台智者大師以空假中三立止觀法門其畧曰法性寂然名止觀

而常照名觀雖言初後无二无別是

三者國清所集於懺願文後更作四悔以懺願二字推之於懺悔發願

已歸命禮觀世音菩薩及一切三寶之後譬意相類之懺悔須
有四段依削之者也慶科此文懺懺歸命

並音切梵字予看新渡印本音切分明有之又見一本刪去諸
梵字无也

并觀惠等文直寫佛位並懺願題云觀音懺摩者

即定也惠者即想也始之本觀想偈等有今去之直寫佛位
者第一置釈迦第二居無量壽等也餘推之可知

又一本全行脱落意故區別全見觀惠等文安於

事後令運念備免使行人時有虛擲前一本即依觀惠等
文煩多捨之取佛位

此一本又文字全行遺去而經意不備故去餘補欠修行之理完然
運念即觀念也諸經儀軌之中有運心供養之法虛擲者一心

之間一念多散亂心如對仏可證請一心已敍分

明正意云再請觀音疏依旧約十意明方已下十意法

再 一嚴淨道 應二末之今日嚴 二一 作一礼 應二始之一心 三 燒香散花
尺 淨道場之文 頂礼之文

應二如是衆等已下願 四 繫念數息 須皆發菩提心之後一供養已
此散花等之諸文矣 前有繫念數息

五請三寶六具二楊枝淨水二七 誦呪八 披陳九 礼拜十 坐禪

今雖二十專依二百錄爲準然此十意各具 事理皆通 感応

俱備三業悉淨三障咸會三德解脱要道一何坦然約 事

皆通者嚴淨道場之中須具餘 則所修物事也所修道理也
豈約事而已而理乎三業身口意也 法障業障煩惱障也三

德 法身般若 即今十科事行約 理一 一 順陀羅尼中道正觀
解脱也

二 歷事修觀此之 事理必藉三業成機 理无不應

應 即業淨 即障除 即會德 即无事理 所修

者事 三業之機成熟 即三德即顯現 三能會則自他不二 邪正一
如是謂事理

經云汝今應下五体投地燒香散花繫念數息爲衆□

故當請彼佛及二菩薩說是語時佛及菩薩俱到此□

請觀音經曰如是我聞一時佛在毘離庵羅樹園与二百五十

比丘乃至毘舍離國一切人民遇大惡病一者眼赤如血二者兩耳出膿

三者鼻中血流四者舌嚙无聲五者所食之物化爲龜澁六者識閉塞

如醉一人有五夜叉一名訖拏迦羅一面黑如墨而有五眼一狗牙上出

吸入精氣時毘舍離大城之中有二長者一名曰二月蓋一与其同類五百

長者俱詣佛所頭面作禮却住二面一白佛言世尊此國人民遇大惡病

良醫者婆盡其道術所不能救唯願世尊慈愍一切救濟病苦一令

得上無患尔時世尊告長者言去此不遠有菩薩名觀世音菩薩

恒以大慈憐愍一切救濟苦厄汝當五体投地作禮燒香散花繫念數息

令心不散經二十念爲衆生故當請彼佛及菩薩神力往毘舍離國住城門放

大光明照彼國皆作金色尔時毘舍離人即具楊枝淨水投与觀世音大悲觀世

音救護一切故而說呪曰普救一切衆生而作是言汝等今者

應當一心称南無佛南无法南无僧南无觀世音菩薩摩訶薩大悲代名称

救護苦厄者如レ此三称レ三寶三称レ觀世音菩薩名燒香五体投地向西方二

心一意令氣息定爲免苦厄請觀世音合十指說偈云願救我苦厄乃至到及

與大涅槃今懺法文唯取此意不取前後次第之文矣

此牟尼設請^{スル}之法^ヲ那^ナ未^タ修行^セ但云說^ウ此語^ヲ時^ニ佛等早降自非三請力安

致於斯投地證^ス三番^ノ作札^ヲ餘^リ證請等三意又國人面授^ク楊枝淨水^ヲ此證道

場及第六^ノ意^ヲ三呪皆云^ニ現前見佛^ニ證^ス誦呪^ノ意^ヲ今懺摩唯始末^ノ
二呪之功德^{アリ}有

見仏之文^ニ蓋^シ拳^ニ始末^ヲ則^ハ處^ニ破障見佛文^ハ證^ス披陳^ノ意^ヲ得^レ聞^ク此經^ノ受
中須^レ備^ニ此儀^ヲ

持讀誦^{スル}等即^チ超^レ越無量無數阿僧祇劫生死之罪^ヲ證^ス唱誦^ノ意^ヲ十意

整^ト一足^ヲ感應炳然行者思^レ之^ヲ炳然明白之貞也矣
首尾十意既^ニ勞^ニ

三業^ヲ勿^ル使^ニ唐喪^一唐者虛也
喪者滅也
常啼^ソ洒^シ血^ヲ韋提^タ扣^ク頭^ヲ此亦今^ノ初^ニ二意感應

之明證^{ナリ}常啼菩薩往往^ニ尋^キ香城^ノ法誦菩薩^ノ所^ニ聽^ク般若^ヲ悲^テ无^キ香花^一
明之具欲^レ賣^レ身^ヲ以^テ充^ト□□天帝尺爲^レ試^ニ信不信^ヲ化^ニ婆羅門^ノ

形^ニ來^テ曰^ク我^レ欲^レ祭^ス天^ヲ用^ニ人^ノ之肉^ヲ汝^ニ喜^ク取^レ刀^ヲ割^ク身^ノ肉^ヲ時^ニ長者女視^レ之^ヲ
□□故^ヲ即^チ答^フ以^テ□□事^ヲ信^ニ帝尺^ヲ信^ニ□□本形^ノ於^レ是^ニ与^ニ長者^ノ女^ト共^ニ具^ニ百

味^ヲ詣^テ佛所^ニ聞^ク般若^ヲ聞^レ法^ヲ未^レ具^ク法涌^即入^ニ禪定^ニ常啼立^テ待^レ之^ヲ至^ニ三十九年^ノ天^ニ出^ル
後^ニ七日^ノ菩薩^即出^定以^テ說^ク般若^ヲ惡魔^叫之^ヲ悲^ヲ以^テ洎^ニ城^ノ内外^ノ水^ヲ常啼^即把^レ刀^ヲ割

身出レ血ヲ洒ク塵天又感レ以腥血變ニ成香水ニ於レ是法誦出レ定説レ般若事畧出ニ大般若
三百九十八卷ニ章提希夫人扣レ頭讀ニ說法ニ者摩竭陀國頻婆闍羅王夫人其子

阿闍世王爲ニ華聽一衆□
則母之信敬ヲ可レ知也
餘例ノ可レ知凡置ニ道場ニ猥ニ同ニ俗務ニ反招ニ罪累ニ

滅障良難此如ニ補行記ニ所レ呵至ニ於正修ニ須ニ心通廣遠ニ事理明白

或未達當ニ自詢ニ解者ニ
皆從ニ道場ニ來住□佛法ニ華經ニ曰我始坐道場
維摩經曰善心是道場乃至拳足下足當ニ知

觀樹亦經行疏曰華嚴之後分ニ陰舍那身ニ礼大□相ニ示レ成□□
觀樹經行

思ニ以道蔭物書曰自用者
小弗詢勿庸證□□當
詢解者之儀

十念今當レ説
阿含經曰十法修レ之至ニ涅槃ニ所謂十念也念仏念法念僧
念天念戒念施念住息念安般念身念死

第一莊嚴道場百録曰當ニ嚴飾道場ニ香泥塗レ地即无上尸羅也

尸羅トハ此懸諸幡蓋即翻ニ法界上一
法師曰香水旛蓋出ニ於敬心一普□經
曰若四輩男女臨終時於二七日ニ造作
六戒也

黃幡ヲ懸テ著シ利上ニ使レ獲テ福徳ヲ離レ入ル難苦ヲ
生シ十方ノ仏前也
速カニ生ス動出ノ解ヲ蓋者觀五

陰〔本〕空ナリト如レ免子縛起テ大慈悲〔 〕之ニ也〔 〕莊嚴〔 備然後安レ〔 〕〔 德〕

五陰ハ色受想行識也照ス五陰皆空ナリト〔 〕〔 煩惱之母忽滅シ
道場ハ東向安テ弥陀像ヲ
无明之子解ス只轉ノ〔 謂煩惱 〕

於ニ觀世音菩薩ノ左肩ニ南面ス觀音像當中東向ス觀音右肩ニ安シ勢

至テ南向更安ニ釋迦〔 無妨ニ設テ楊枝淨水ヲ若シ便利セハ左右以テ灰塗リ身ニ澡ニ浴

清淨ニ着テ新淨衣ヲ行者當十人已還ル當シ西向ス席地ニ若シ早濕ナラハ置ニ低脚

床〔 日 〕盡レ力ヲ當シ供養ス恐ル力ノ不レ逮テ聽ル初日ニ必先ツ課テ己ノ資財ヲ伸テ傾ル竭

按スルニ大悲經ヲ三七日ナリ此經ハ七ノ日ナリ悉ク用テ齋日ヲ建ツ道場ヲ〔 〕〔 齋日者經

阿含經ニ日八日十四十五日爲八齋日四失五口止諸臣ヲ觀〔 〕世間善不善ヲ
齋法者盡ニ形壽ヲ持テ五戒ヲ是真人也我今持テ齋至明〔 〕不殺不

偷不姪不妄不酒不レ在高床ニ不レ非レ時食セ不レ華鬘環珞ヲ香油塗リ身ニ不レ哥舞
作倡一故一往ニ視聽不レ投ニ金銀錢寶ニ云々

第二作礼百録 日各執香炉 一心一意向彼西方五体投地須

雙膝前 詣雙肘續施方 額扣肝膽委地 想佛足下施手承如對

目前首唱衆和云 額輪二掌輪二膝輪謂是五体輪授地即敬之至極也首

唱是也

一心頂礼本師釋迦牟尼世尊 環師曰釋迦牟尼云能仁寂默謂其能仁

号能忍世尊 唯我独尊之義 想云能礼所禮性空寂感應道交

難思議 我道場如帝珠 釋迦牟尼影現中我身影現釋迦前

頭面接足歸命礼 華嚴曰天帝尺善法堂前以摩尼珠爲網

映重主伴无盡 此則明事无尋法界言於我此道場礼靈山會上彼

至无量壽即云无量壽佛影現中餘効此礼法想云真空

世間空ノ何モノ本處

法性如虚空^{（空也）}當住法寶難思議^{（思シ）}我身影現^{（ス）}法寶前^{（ニ）}莫^{（シ）}不^{（スト）}

皆^{（ナ）}悉^{（ク）}歸命禮^{（一）}禮^{（二）}菩薩僧^{（ヲ）}準^{（ス）}上^{（ノ）}禮佛^{（ニ）}但改^{（タム）}其^{（ノ）}菩薩^{（ヲ）}或^{（ハ）}一切^{（ノ）}

聖僧影現^{（レ）}中堆^{（ニ）}禮^{（ス）}觀音^{（ヲ）}末句^{（ニ）}云爲^{（メ）}求^{（レ）}滅障^{（ヲ）}接足禮^{（ス）}此^{（ハ）}是懺悔之主^{（ナレハ）}

當^{（ニ）}頂^{（ニ）}禮^{（ス）}表破^{（ル）}三障^{（ヲ）}及勤重^{（ヲ）}故耳^{（ニ）}一心^{（一）}——環師^{（ノ）}曰西方^{（ハ）}
免^{（ク）}毀^{（テ）}拆阿弥陀^{（ヲ）}

云无量壽世間^{（ノ）}苦惱即生死无常^{（ナリ）}也此仏於^{（テ）}毀拆之際^{（ニ）}示^{（シ）}无量壽^{（ヲ）}則了^{（シ）}生死^{（ヲ）}

以救^{（ニ）}度世間^{（ノ）}一心^{（一）}——傳灯^{（ニ）}曰第一毘婆尸^{（ノ）}仏過去莊嚴劫^{（ニ）}九百九十八尊^{（ナリ）}偈^{（ニ）}曰身^{（ハ）}
死苦^{（一）}也 從^{（ニ）}无相^{（ノ）}中^{（ニ）}受^{（ク）}生猶^{（シ）}如幻出^{（ル）}諸形像^{（ヲ）}幻人心識^{（ハ）}本来无罪^{（一）}福

皆空^{（ニ）}无^{（レ）}所住長阿含^{（ニ）}曰人壽八萬歲時此佛出世種^{（ハ）}利利姓^{（ハ）}狗利若父^{（ハ）}槃頭母^{（ハ）}
頭婆提居^{（ニ）}槃頭婆提城^{（ヲ）}坐^{（ハ）}波^{（ニ）}羅樹下^{（ニ）}說法^{（ス）}三會度^{（レ）}人三十四萬八千人神足

二^{（一）}一名^{（ハ）}賽茶^{（ト）}二名^{（ハ）}提舍^{（ト）}侍^{（ハ）}无憂子^{（ハ）}方膺^{（ニ）}第二戸棄佛莊嚴劫第九百九
十九尊^{（ナリ）}偈曰起^{（ス）}諸善法^{（ヲ）}本是幻^{（ナリ）}造^{（ル）}諸惡業^{（ヲ）}亦是幻^{（ナリ）}身^{（ハ）}如^{（シ）}聚沫^{（一）}心^{（ハ）}如^{（シ）}風^{（一）}幻^{（一）}出^{（テ）}

无^{（レ）}根^{（一）}无^{（レ）}實相^{（一）}長阿含曰人壽七萬歲時此佛出世種利利姓^{（ハ）}狗利若父^{（ハ）}明相^{（ハ）}
母^{（ハ）}光耀居^{（ス）}光相城^{（ニ）}坐^{（ハ）}芬陀利樹下^{（ニ）}說法^{（ス）}三會度^{（レ）}人二十五萬神足^{（一）}一名^{（ハ）}阿毘

浮^{（ト）}二^{（一）}一名^{（ハ）}婆^{（ト）}二^{（一）}待者忍行子^{（ハ）}无量第三毘舍浮佛莊嚴劫第一^{（ノ）}千尊偈曰
假^{（レ）}借^{（レ）}四大^{（ヲ）}以爲^{（シ）}身^{（ト）}本无^{（レ）}生^{（スル）}因^{（レ）}境^{（シ）}若^{（シ）}无^{（ク）}心亦无^{（レ）}罪福如^{（シ）}幻^{（一）}起^{（ル）}亦滅^{（ス）}長阿含

